吉田遺跡第Ⅰ地区A区出土の未報告遺物について

中　村　幸　弘

昨年度の年報Ⅺにおいて、吉田遺跡第Ⅰ地区A区の出土遺物の報告を行った。報告後、埋蔵文化財資料館の遺物収蔵室から、「平川」や「1966.7.8」などの注記をもつ遺物が3点見つかった。「平川」の注記は、吉田遺跡の最初の発掘である第Ⅰ地区A区の遺物のみに用いられ、それ以降の調査の遺物には使用されていない。「1966.7.8」は、第Ⅰ地区A区の調査期間中にあたる。これらの理由により、3点の遺物は第Ⅰ地区A区からの出土と判断した。既に第Ⅰ地区A区の報告は終了しているが、この3点の遺物について追加報告を行う。

なお、「第4トレンチ」出土の注記をもつ太型蛤刃石斧（2）は、年報Ⅴ「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」に、トレンチ出土遺物（Fig.86－234）として報告されているものである。しかし、「平川吉田遺跡」の注記があり、第Ⅰ地区A区出土と訂正しておく。おそらく、過去の度重なる収蔵場所移動の際に、「保存地区」コンテナに混入し、そのまま報告されたのであろう。このような遺物は、他にもまだ多く未整理のコンテナに含まれているものと思われる。今後の整理の進展過程において明らかとなろう。随時追加報告を行う予定である。

1の坏身は受け部径12.4cm、口径10.4cm、器高3.4cmを測る。灰白色を呈し、胎土は精良で1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。成形はマキアゲ・ミズビキ手法を用いている。立ち上がりは短く、内側に傾斜しており、端部は丸みを帯びており、段は退化している。底部に回転ヘラ切りが未調整のままで残っている。他の部分には回転ナデ調整が見られる。また、底部内面には不定方向のユビなでが施されている。立ち上がりや受け部の一部が欠損してはいるものの、ほぼ原形をとどめている。なお立ち上がりの形態や口径の大きさなどから、陶邑編年のⅡ型式6段階にあたると考えられる。したがって7世紀第1四半期という絶対年代が比定される。

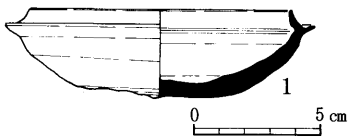

Fig. 94　A区出土須恵器実測図

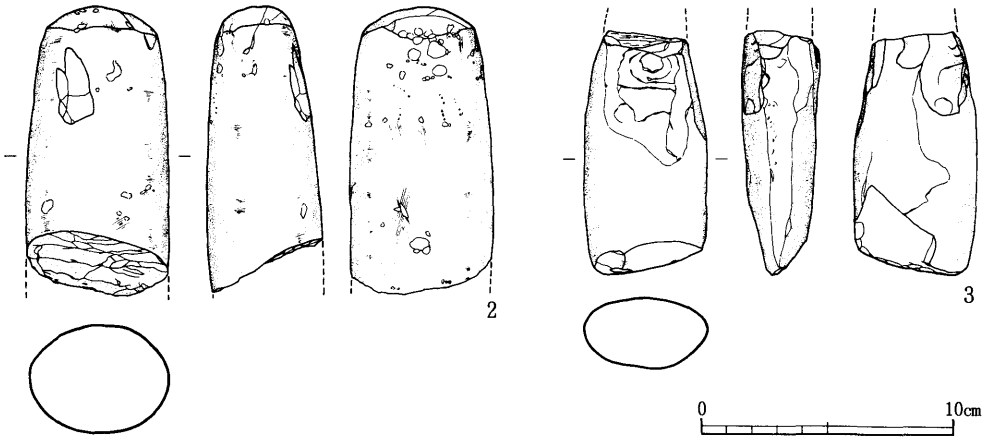

Fig. 95　A区出土石器実測図

第3トレンチ出土の2は太型蛤刃石斧である。刃部が破損している。現存長12.2cm、幅5.7cm、厚さ4.4cm、現重量470.6gを計る。石材は安山岩である。表面には調整または使用痕と思われる研磨痕、擦痕が所々に認められる。また、全面に敲打調整の跡が見られる。一部に表面剥離が見られるものの比較的表面の調整痕等は良く残っている。基端は円基であり、部分的に欠損しているがほぼ原形をとどめている。側縁は平行であり、断面は正円に近い楕円形を呈しているので平井氏の蛤刃石斧[1]の形態分類によればⅢB類に属する。

第4トレンチ出土の3も、太型蛤刃石斧である。基部が破損している。現存長9.6cm、幅4.9cm、厚さ3.0cm、現重量223.7gを計る。石材は結晶片岩である。表面の剥離がひどく、調整痕を確認するのが困難である。側面には粗割によるものと思われる剥離面がある。また刃部に見られる大きな剥離面（3.3cm×1.3～2.3cm）は石器製作時のものではなく、後世のものである。基部右上には自然面が残っており、全体的に粗雑な感をうける。基部が破損しており、全体の形態は明かではないが、現存する形から判断すると長三角形か長台形状を呈していたと推定される。また断面の形状は扁平な楕円形を呈しており、前述の形態分類によればⅠA類かあるいはⅡA類に属すると推定される。

3の石斧に比べて、2の石斧は大型で表面の調整も丁寧に施されている。さらに2の石斧は、断面が正円形に近くなっていることや側縁が平行になっていることなど、3の石斧よりも新しい要素が見受けられる。

〔註〕

1）平井勝『弥生時代の石器』（『考古学ライブラリー64』ニューサイエンス社、1991年）